

Lieber Ludwig,

2020年は君の生誕250年をお祝いする華やかな一年になることを心から楽しみにしていた人たちが世界中に大勢いたことでしょう。

ところが、予想だにしなかったパンデミックが起りました。どうにかコンサートが開催できる状況にはなりましたが、客席や舞台上の演奏者は間隔を取らねばならず、ブラボーも禁止。カーテンコールは手を繋ぐことなく、終演後のプレイヤー同士のハグや握手は肘タッチへと変わりました。

それでも「音楽はあ」と心にとり続ける」という事実だけが、今を生きる私たちの気持ちの拠り所でもあります。

Ludwig, それでも君の遺した音楽は、人々が「予想だにしなかった形で」大きな喜びをもたらしました。今の時代にしかない音楽/出せない音により、君の音楽はアップデートされ続けています。それはなんというか、すごく素敵なことです。

私たちはアジアの極東で生まれ育ち、あるタイミングでそれぞれの楽器を手にし、ドイツという国にすっかり魅了された3人の音楽家です。

若き日の君が書いた作品たちを、250年後の世界、東京という最高に刺激的な街から演奏してみようと思います。

プログラム

Program

L. v. ベートーヴェン

- クラリネットとチェロ(フゴット)のための
二重奏曲 第3番 変ロ長調 WoO. 27

I Allegro sostenuto

II Aria con Variazioni

- 「わが心はもはやうつろなりて」の主題による
6つの変奏曲ト長調 WoO. 70

- 三重奏曲『街の歌』 変ロ長調 Op. 11

I Allegro con brio

II Adagio

III Thema: Pria ch'io l'impegno

Allegretto con variazioni

～ 休憩 ～

(15分)

• 三重奏曲 第8番 変ホ長調 Op. 38

(七重奏曲 Op. 20 の作曲家自身による編曲版)

I Adagio - Allegro con brio

II Adagio cantabile

III Tempo di Menuetto - Trio

IV Andante con Variazioni

V Scherzo: Allegro molto e vivace

- Trio

VI Andante con moto alla Marcia

- Presto

ウィーンに憧れる若い君には信じられないかもしれませんが、君の故郷のボンは今、偉大な音楽家を生んだ街として世界中の音楽家や音楽愛好家の聖地になっています。偉大な音楽家とは、そう、粉れもなく、君 Ludwig のことです。

君がまだ13歳だった頃、ケルン選帝候の宮廷で働いていたお父さんがアルコール中毒で心身を病んでしまつたこと…この先どうなってしまうのか、君は不安で仕方なかつたことでしょう。しかし宮廷の大人たちが、働けなくなつたお父さんの代わりに君を雇ってくれたのですよね。

人生において不運に思えるようなことが思いがけず幸運に転じるというのは、いつの時代にも起こり得ることのようです。その後まもなく就任した若い選帝候によって、君は新しい国立劇場のオーケストラにヴァイオラ奏者として採用されたこと！ここで君がいかに多くを学んだか、その後の君の才能が開花していくのを知っている私達には想像に難くありません。

このオーケストラは演奏能力が高いだけでなく、団員同士の雰囲気がとても良かったと聞いています。

「クラリネットとファゴットのための二重奏曲」からは、親友同士の2人の奏者が親密な会話を繰り広げる様子が目に浮かびます。彼らもきっと、君の同僚だったのでしょうか？

その2人のためだけに書かれたであろうこの曲は、なんと21世紀になつても世界中で、それも様々な楽器で演奏されています。今日はクラリネットとチェロで演奏すると言つたら、君はどんな反応をするでしょうか？生涯を通してチェロを用いた名曲をたくさん生み出してくれた君のこと、きっとこの編成での演奏も楽しんでくれると信じています。

“もはや私の心には
青春の輝きが感じられない
私の苦しみは
愛よ お前の罪なのだ”

作曲当時25歳だった君の目に、この主題はきっと、眩しいほど純粋に映ったことでしょう。君の身近な友人は「後の人生において、恋人がいなかった時期がなく、たいてい身分の高い女性に熱をあげていた」と語っていたそうですね。同じ時期に作曲され、君簡にて自ら“Die Verliebte”（愛する君）と呼んだピアノソナタ第4番さながらその熱は美術にも向かっていったものと私は感じています。

風変わりで気難しい印象を持たれがらうだけれど、バハが神へ音楽を捧げたように、敬愛する君は、美術に人生を捧げていたように思えます。そんな情熱的で人間らしい姿に、時代を超えてもなお、多くの方が魅了されています。

“お前は私をつねり、突つき、刺し、噛みつく
ああ これは何なのだ？
どうか 哀れんでください！ 愛とはこれほどまでに
私を絶望させるものなのか”

この歌詞がついたパイツェロのオペラ〈水車小屋の娘〉は、当時最も流行していた歌曲です。君の作品からは、スタイルこそ古典的であるものの、既にロマン派を先取る感性が垣間見られます。その根底にあるのは、切なくも美しい「愛情」であることは、作品を通して誰もが感じられることでしょう。

クラシックを専門とする私たちが最も残念に思うことは、目の前にある音楽について作曲家に直接問うことができないことだと、いつも思います。

特に君の作品はリハーサルを重ねれば重ねるほど、尋ねたいことが山ほど現れます。何を意図してどこにわざとサビではなく升を記したのか、なぜオーケレションを書き分けたのか、どういうニュアンスのスタッカートなのか、記譜のどこまでが君の意図なのか、本当はどんなテンポで演奏するのが理想的なのか...

同じ時代に生きている作曲家とお話する機会があるたびに、楽譜という媒体がいかにあくまでイメージの具現化のための手段でしかないことに気がさします。作曲家と奏者の間に起るディスカッションにより、楽譜なんていとも簡単に書き換えられてしまうのです。だからこそ君と言葉を用いて対話ができたら、君の音楽はもっと豊かなものとして聴衆と共有できるだろうと思います。

『街の歌』という副題のついているこの作品に、君は当時アメリカ人気がなかったクラリネットを用いました。ヨーゼフ・ベーズというクラリネット奏者から依頼されたそうですね。彼のクラリネットの音はこの作品だけでなく、のちの交響曲に現れる数々の美しい旋律の核になったのでしょうか。

第3楽章に使われているテーマは君の書いたものではなく、当時大衆に親しまれていた音楽とのこと。子どもの頃に慣れ親しんだ童謡を彷彿とさせるような可憐な音楽です。この作品を通して、音楽を大衆にとっても身近なものにさせたかったという君の願望を感じます。

直接問うことができない、ましてや年月を経て演奏する時代も違う。しかしそこには新たなファンタジーが生まれ、現代に君の時代の作品を演奏する意味が芽生えるのだと、私は信じています。そしてそういう考えに、Ludwig, 君もきっと共感してくれそうですね？

人々はこの七重奏曲をディベルティメント (=嬉遊曲) と親しみを込めて呼んでいました。若かりし頃の君と一躍有名にするには充分なほどの傑作で、爆発的な人気を博しました。偉大なる師匠であったJ.ハイドンがディベルティメントを約60曲作曲したことは、間違なく若きLudwigに大きな影響を与えたことでしょう。

1792年にウィーンへ移住してから、ウィーンの聴衆に向けた明るく楽しく、軽やかな作品を多く手掛けていますが、それはどれほど君の意思を反映させたものだったのか気になります。というのも、七重奏曲が多くの人に称賛されるのと、ある時期から拒んでいたと身にしたからです。とはいえ、自作曲をより多くの場で、より多くの人に演奏してもらう喜びがあつたからでしょう、この七重奏曲をはじめ、生涯、大掛かりな編曲に取り組んでいました。そして君の全ての作品に、人生の葛藤と決意の念が見られます。本日三重奏で演奏するこの作品にも、若々しさの中に、不安や祈りなど、様々な感情が入り混じっています。葛藤は続き、最後の弦楽四重奏曲の自筆譜には「Muss es sein? そうでなければならぬのか」後に「Es muss sein!」(ならぬのだ!)と力強いメッセージが残されていますね。私たちは250年後の世界から、君の芸術を追って求め続ける姿に想いを馳せて、演奏します。

今日は、いわゆる君の「初期」と呼ばれる作品のみを演奏します。

ボンからウィーンに移住し、ハイドンやツェンク、サリエリに師事し、得意な即興演奏を様々な場で発揮し、作曲家としてもピアニストとしても名声を高めていた時期です。1798年(28歳)頃から既に聴覚障害の兆候が見られましたが、今日演奏するプログラムは、どれも先の未来への希望に溢れています。

私たちがクラシック演奏家の役割は、偉大な作曲家たちが遺した作品に再び命を宿すことだと心得ています。しかし楽譜に目を凝らし、耳を傾けていると、250年前を生きる君が、まるで私たちの未来を生きているかのように、一筋の光を照らしてくれます。
— だから君に問いたいことが沢山あるのです。

Muss es sein? こうあるべきなのでしょうか?

.... 答えはきっと、私たちの音楽の中に。

敬意を込めて

東 紉衣 Sae Hiyori

山口 徳花 Naika Yamaguchi

守重 結加 Yuka Munegi